南洲手抄言志録

南洲手抄言志録

佐藤一齋・秋月種樹（古香）

青空文庫

一　勿認游惰以爲寬裕。勿認嚴刻以爲直諒。勿認私欲以爲志願。

〔譯〕游惰を認めて以て寬裕と爲すこと勿れ。嚴刻を認めて以て直諒と爲すこと勿れ。私欲を認めて以て志願と爲すこと勿れ。

二　毀譽得喪、眞是人生之雲霧、使人昏迷。一掃此雲霧、則天青日白。

〔譯〕毀譽得喪は、眞に是れ人生の雲霧、人をして昏迷せしむ。此の雲霧を一掃せば、則ち天青く日白し。

〔評〕徳川慶喜公は勤王の臣たり。幕吏の要する所となりて朝敵となる。猶南洲勤王の臣として終りを克くせざるごとし。公は罪を宥し位に敍せらる、南洲は永く反賊の名を蒙る、悲しいかな。（原漢文、下同）

三　唐虞之治、只是情一字。極而言之、萬物一體、不外於情之推。

〔譯〕唐虞の治は只是れ情の一字なり。極めて之を言へば、萬物一體も情の推に外ならず。

〔評〕南洲、官軍を帥ゐて京師を發す。婢あり別れを惜みて伏水に至る。兵士環つて之を視る。南洲輿中より之を招き、其背を拊つて曰ふ、好在なれと、金を懷中より出して之に與へ、旁ら人なき若し。兵士太だ其の情を匿さざるに服す。幕府砲臺を神奈川に築

き、外人の來り觀るを許さず、木戸公役徒に雜り、自ら畚を荷うて之を觀る。茶店の老嫗あり、公の常人に非ざるを知り、善く之を遇す。公志を得るに及んで、厚く之に報ゆ。皆情の推なり。

四　凡作事、須要有事天之心。不要有示人之念。

〔譯〕凡そ事を作すには、須らく天に事ふるの心あるを要すべし。人に示すの念あるを要せず。

五　憤一字、是進學機關。舜何人也、予何人也、方是憤。

〔譯〕憤の一字、是れ進學の機關なり。舜何人ぞや、予何人ぞや、方に是れ憤。

六　著眼高、則見理不岐。

〔譯〕眼を著くること高ければ、則ち理を見ること岐せず。

〔評〕三條公は西三條、東久世諸公と長門に走る、之を七卿脱走と謂ふ。幕府之を宰府に竄す。既にして七卿が勤王の士を募り國家を亂さんと欲するを憂へ、浪華に幽するの議あり。南洲等力めて之を拒ぎ、事終に熄む。南洲人に語つて曰ふ、七卿中他日關白に任ぜらるゝ者は、必三條公ならんと、果して然りき。

七　性同而質異。質異、教之所由設也。性同、教之所由立也。

〔譯〕性は同じうして而て質は異る。質異るは教の由つて設けらるゝ所なり。性同じきは教の由つて立つ所なり。

八　喪己斯喪人。喪人斯喪物。

〔譯〕己を喪へば斯に人を喪ふ。人を喪へば斯に物を喪ふ。

九　士貴獨立自信矣。依熱附炎之念、不可起。

〔譯〕士は獨立自信を貴ぶ。熱に依り炎に附くの念、起す可らず。

〔評〕慶應三年九月、山内容堂公は寺村左膳、後藤象次郎を以て使となし、書を幕府に呈す。曰ふ、中古以還、政刑武門に出づ。洋人來航するに及んで、物議紛々、東攻西撃して、内訌嘗て※る時なく、終に外國の輕侮を招くに至る。此れ政令二途に出で、天下耳目の屬する所を異にするが故なり。今や時勢一變して舊規を墨守す可らず、宜しく政權を王室に還し、以て萬國竝立の基礎を建つべし。其れ則ち當今の急務にして、而て容堂の至願なり。幕下の賢なる、必之を察するあらんと。他日幕府の政權を還せる、其事實に公の呈書に本づけり。當時幕府既に衰へたりと雖、威權未だ地に墜ちず。公抗論して

忌まず、獨立の見ありと謂ふべし。

一〇　有本然之眞己、有躯殻之假己。須要自認得。

〔譯〕本然の眞己有り、躯殻の假己有り。須らく自ら認め得んことを要すべし。

〔評〕南洲胃を病む。英醫偉利斯之を診して、勞動を勸む。南洲是より山野に游獵せり。人或は病なくして犬を牽き兎を逐ひ、自ら南洲を學ぶと謂ふ、疎なり。

一一　雲煙聚於不得已。風雨洩於不得已。雷霆震於不得已。斯可以觀至誠之作用。

〔譯〕雲煙は已むことを得ざるに聚る。風雨は已むことを得ざるに洩る。雷霆は已むことを得ざるに震ふ。斯に以て至誠の作用を觀る可し。

一二　動於不得已之勢、則動而不括。履於不可枉之途、則履而不危。

〔譯〕已むことを得ざるの勢に動けば、則ち動いて括せず。枉ぐ可らざるの途を履めば、則ち履んで危からず。

〔評〕官軍江戸を伐つ、關西諸侯兵を出して之に從ふ。是より先き尾藩宗家を援けんと欲する者ありて、私かに聲息を江戸に通ず。尾公之を患へ、田中不二麿、丹羽淳太郎等と議して、大義親を滅すの令を下す、實に已むことを得ざるの擧に出づ。一藩の方向以て

定れり。

一三　聖人如強健無病人。賢人如攝生愼病人。常人如虚羸多病人。

〔譯〕聖人は強健病無き人の如し。賢人は攝生病を愼む人の如し。常人は虚羸病多き人の如し。

一四　急迫敗事。寧耐成事。

〔譯〕急迫は事を敗る。寧耐は事を成す。

〔評〕大坂城陷る。徳川慶喜公火船に乗りて江戸に歸り、諸侯を召して罪を俟つの状を告ぐ。余時に江戸に在り、特に別廳に召し告げて曰ふ。事此に至る、言ふ可きなし。汝將に京に入らんとすと聞く、請ふ吾が爲めに恭順の意を致せと。余江戸を發して桑名に抵り、柳原前光公軍を督して至るに遇ふ。余爲めに之を告ぐ。京師に至るに及んで、松平春嶽公を見て又之を告ぐ。慶喜公江戸城に在り、衆皆之に逼り、死を以て城を守らんことを請ふ。公聽かず、水戸に赴く、近臣二三十名從ふ。衆奉じて以て主と爲すべきものなく、或は散じて四方に之き、或は上野に據る。若し公をして耐忍の力無く、共に怒つて事を擧げしめば、則ち府下悉く焦土と爲らん。假令都を遷すも、其の盛大を極むること今日の如きは實に難からん。然らば則ち公常人の忍ぶ能はざる所を忍ぶ、其功

亦多し。舊藩士日高誠實時に句あり云ふ。
「功烈尤も多かりしは前内府。至尊直に鶴城の中に在り」と。

一五　聖人安死。賢人分死。常人恐死。
〔譯〕聖人は死を安んず。賢人は死を分とす。常人は死を恐る。

一六　賢者臨※、見理當然、以爲分、恥畏死、而希安死、故神氣不亂。又有遺訓、足以聳聽。而其不及聖人亦在於此。聖人平生言動無一非訓。而臨※、未必爲遺訓。視死生眞如晝夜、無所著念。
〔譯〕賢者は※するに臨み、理の當に然るべきを見て、以て分と爲し、死を畏るゝを恥ぢて、死を安んずるを希ふ、故に神氣亂れず。又遺訓あり、以て聽を聳かすに足る。而かも其の聖人に及ばざるも亦此に在り。聖人は平生の言動一として訓に非ざるは無し。而て※するに臨みて、未だ必しも遺訓を爲らず。死生を視ること眞に晝夜の如し、念を著くる所無し。
〔評〕十年の役、私學校の徒、彈藥製造所を掠む。南洲時に兎を大隅山中に逐ふ。之を聞いて猝に色を變へて曰ふ、誤つたと。爾後肥後日向に轉戰して、神色夷然たり。

一七　堯舜文王、其所遺典謨訓誥、皆可以爲萬世法。何遺命如之。至於成王顧命、曾子善言、

賢人分上自當如此已。因疑孔子泰山之歌、後人假託爲之。檀弓叵信、多此類。欲尊聖人、而却爲之累。

〔譯〕堯舜文王は、其の遺す所の典謨訓誥、皆以て萬世の法と爲す可し。何の遺命か之に如かん。成王の顧命、曾子の善言に至つては、賢人の分上自ら當に此の如くなるべきのみ。因つて疑ふ、孔子泰山の歌、後人假託之を爲れるならん。檀弓の信じ※きこと此の類多し。聖人を尊ばんと欲して、却つて之が累を爲せり。

一八　一部歷史、皆傳形迹、而情實或不傳。讀史者、須要就形迹以討出情實。

〔譯〕一部の歷史、皆形迹を傳へて、情實或は傳らず。史を讀む者は、須らく形迹に就いて以て情實を討ね出だすことを要すべし。

一九　博聞強記、聰明橫也。精義入神、聰明竪也。

〔譯〕博聞強記は、聰明の橫なり。精義神に入るは、聰明の竪なり。

二〇　生物皆畏死。人其靈也、當從畏死之中、揀出不畏死之理。吾思、我身天物也。死生之權在天、當順受之。我之生也、自然而生、生時未嘗知喜矣。則我之死也、應亦自然而死、死時未嘗知悲也。天生之而天死之、一聽于天而已、吾何畏焉。吾性即天也。軀殼則藏天之室也。

精氣之爲物也、天寓於此室。遊魂之爲變也、天離於此室。死之後即生之前、生之前即死之後。而吾性之所以爲性者、恒在於死生之外、吾何畏焉。夫晝夜一理、幽明一理。原始反終、知死生之理、何其易簡而明白也。吾人當以此理自省焉。

〔譯〕生物は皆死を畏る。人は其靈なり、當に死を畏るゝの中より死を畏れざるの理を揀出すべし。吾れ思ふ、我が身は天物なり。死生の權は天に在り、當に之を順受すべし。我れの生るゝや自然にして生る、生るゝ時未だ嘗て喜ぶことを知らず。則ち我の死するや應に亦自然にして死し、死する時未だ嘗て悲むことを知らざるべし。天之を生みて、天之を死す、一に天に聽さんのみ、吾れ何ぞ畏れん。吾が性は即ち天なり、躯殻は則ち天を藏むるの室なり。精氣の物と爲るや、天此の室に寓す。遊魂の變を爲すや、天此の室を離る。死の後は即ち生の前なり、生の前は即ち死の後なり。而て吾が性の性たる所以は、恒に死生の外に在り、吾れ何ぞ畏れん。夫れ晝夜は一理なり、幽明は一理なり。始めを原ねて終りに反らば、死生の理を知る、何ぞ其の易簡にして明白なるや。吾人は當に此の理を以て自省すべし。

二一　畏死者生後之情也、有躯殻而後有是情。不畏死者生前之性也、離躯殻而始見是性。人須自得不畏死之理於畏死之中、庶乎復性焉。

〔譯〕死を畏るゝは生後の情なり、躯殻有つて後に是の情あり。死を畏れざるは生前の性な

り、躯殻を離れて始て是の性を見る。人は須らく死を畏れざるの理を死を畏るゝの中に自得すべし、性に復るに庶し。

〔評〕幕府勤王の士を逮ふ。南洲及び伊地知正治、海江田武治等尤も其の指目する所となる。僧月照嘗て近衛公の密命を啣みて水戸に至る、幕吏之を索むること急なり。南洲其の免れざることを知り相共に鹿兒島に奔る。一日南洲、月照の宅を訪ふ。此の夜月色清輝なり。預め酒饌を具へ、舟を薩海に泛ぶ、南洲及び平野次郎一僕と從ふ。月照船頭に立ち、和歌を朗吟して南洲に示す、南洲首肯する所あるものゝ如し、遂に相擁して海に投ず。次郎等水聲起るを聞いて、倉皇として之を救ふ。月照既に死して、南洲は蘇ることを得たり。南洲は終身月照と死せざりしを憾みたりと云ふ。

二二　誘掖而導之、教之常也。警戒而喩之、教之時也。躬行以率之、教之本也。不言而化之、教之神也。抑而揚之、激而進之、教之權而變也。教亦多術矣。

〔譯〕誘掖して之を導くは、教の常なり。警戒して之を喩すは、教の時なり。躬に行うて之を率きゐるは、教の本なり。言はずして之を化するは、教の神なり。抑へて之を揚げ、激して之を進ましむるは、教の權にして而て變なり。教も亦術多し。

二三　閑想客感、由志之不立。一志既立、百邪退聽。譬之清泉湧出、旁水不得渾入。

〔譯〕閑想客感は、志の立たざるに由る。一志既に立てば、百邪退き聽く。之を清泉湧出せば、旁水渾入することを得ざるに譬ふべし。

〔評〕政府郡縣の治を復せんと欲す、木戸公と南洲と尤も之を主張す。或ひと南洲を見て之を説く、南洲曰く諾すと。其人又之を説く、南洲曰く、吉之助の一諾、死以て之を守ると、他語を交へず。

二四　心爲靈。其條理動於情識、謂之欲。欲有公私、情識之通於條理爲公。條理之滯於情識爲私。自辨其通滯者、即便心之靈。

〔譯〕心を靈と爲す。其の條理の情識に動く、之を欲と謂ふ。欲に公私有り、情識の條理に通ずるを公と爲す。條理の情識に滯るを私と爲す。自ら其の通と滯とを辨ずるは、即ち心の靈なり。

二五　人一生所遭、有險阻、有坦夷、有安流、有驚瀾。是氣數自然、竟不能免、即易理也。人宜居而安、玩而樂焉。若趨避之、非達者之見。

〔譯〕人一生遭ふ所、險阻有り、坦夷有り、安流有り、驚瀾有り。是れ氣數の自然にして、竟に免るゝ能はず、即ち易理なり。人宜しく居つて安んじ、玩んで樂しむべし。若し之を趨避せば、達者の見に非ず。

〔評〕或ひと岩倉公幕を佐くと讒す。公薙髪して岩倉邸に蟄居す。大橋愼藏、香川敬三、玉松操　北島秀朝等、公の志を知り、深く結納す。南洲及び大久保公、木戸公、後藤象次郎、坂本龍馬等公を洛東より迎へて、朝政に任ぜしむ。公既に職に在り、屡刺客の狙撃する所となり、危難累りに至る、而かも毫も趨避せず。

二六　心之官則思。思字只是工夫字。思則愈精明、愈篤實。自其篤實謂之行、自其精明謂之知。知行歸於一思字。

〔譯〕心の官は則ち思ふ。思の字只是れ工夫の字なり。思へば則ち愈精明なり、愈篤實なり。其の篤實より之を行と謂ひ、其の精明より之を知と謂ふ。知と行とは一の思の字に歸す。

二七　處晦者能見顯。據顯者不見晦。

〔譯〕晦に處る者は能く顯を見る。顯に據る者は晦を見ず。

二八　取信於人難也。人不信於口、而信於躬。不信於躬、而信於心。是以難。

〔譯〕信を人に取るは難し。人は口を信ぜずして躬を信ず。躬を信ぜずして心を信ず。是を以て難し。

〔評〕南洲守庭吏と爲る。島津齊彬公其の眼光炯々として人を射るを見て凡人に非ず

と以爲ひ、拔擢して之を用ふ。公嘗て書を作り、南洲に命じて之を水戸の烈公に致さしめ、初めより封緘を加へず。烈公の答書も亦然り。

二九　臨時之信、累功於平日。平日之信、收効於臨時。

〔譯〕臨時の信は、功を平日に累ぬればなり。平日の信は、効を臨時に收むべし。

〔評〕南洲官軍の先鋒となり、品川に抵る、勝安房、大久保一翁、山岡鐵太郎之を見て、慶喜罪を俟つの状を具陳し、討伐を弛べんことを請ふ。安房素より南洲を知れり、之を説くこと甚だ力む。乃ち令を諸軍に傳へて、攻撃を止む。

三〇　信孚於上下、天下無甚難處事。

〔譯〕信上下に孚す、天下甚だ處し難き事無し。

三一　意之誠否、須於夢寐中事驗之。

〔譯〕意の誠否は、須らく夢寐中の事に於て之を驗すべし。

〔評〕南洲弱冠の時、藤田東湖に謁す、東湖は重瞳子、軀幹魁傑にして、黄麻の外套を被、朱室の長劍を佩して南洲を邀ふ。南洲一見して瞿然たり。乃ち室内に入る、一大白を屬して酒を侑めらる。南洲は素と飲を解せず、強ひて之を盡す、忽ち酩酊して

嘔吐席を汚す。東湖は南洲の朴率にして飾るところなきを見て酷だ之を愛す。嘗て曰ふ、他日我が志を繼ぐ者は獨此の少年子のみと。南洲も亦曰ふ、天下眞に畏る可き者なし、唯畏る可き者は東湖一人のみと。二子の言、夢寐相感ずる者か。

三二　不起妄念是敬。妄念不起是誠。

〔譯〕妄念を起さゞるは是れ敬なり。妄念起らざるは是れ誠なり。

三三　因民義以激之、因民欲以趨之、則民忘其生而致其死。是可以一戰。

〔譯〕民の義に因つて以て之を激し、民の欲に因つて以て之を趨らさば、則ち民其の生を忘れて其の死を致さん。是れ以て一戰す可し。

〔評〕兵數は孰れか衆き、器械は孰れか精なる、糧食は孰れか積める、この數者を以て之を較べば、薩長の兵は固より幕府に及ばざるなり。然り而して伏見の一戰、東兵披靡するものは何ぞや。南洲及び木戸公等の※、民の欲に因つて之を趨らしたればなり。是を以て破竹の勢ありたり。

三四　漸必成事、惠必懷人。如歷代姦雄、有竊其祕者、一時亦能遂志。可畏之至。

〔譯〕漸は必ず事を成し、惠は必ず人を懷づく。歷代姦雄の如き、其祕を竊む者有り、一時

亦能く志を遂ぐ。畏る可きの至りなり。

三五　匿情似愼密。柔媚似恭順。剛愎似自信。故君子惡似而非者。

〔譯〕匿情は愼密に似る。柔媚は恭順に似る。剛愎は自信に似る。故に君子は似て非なる者を惡む。

三六　事君不忠非孝也、戰陳無勇非孝也。曾子孝子、其言如此。彼謂忠孝不兩全者、世俗之見也。

〔譯〕君に事へて忠ならざるは孝に非ざるなり、戰陳に勇無きは孝に非ざるなりと。曾子は孝子なり、其の言此の如し。彼の忠孝兩全せずと謂ふは、世俗の見なり。

〔評〕十年の難、賊の精鋭熊本城下に聚る。而て援軍未だ達せず。谷中將死を以て之を守り、少しも動かず。賊勢遂に屈し、其兵を束する能はず。昔者加藤嘉明言へるあり。曰ふ、將を斬り旗を搴るは、氣盛なる者之を能くす、而かも眞勇に非ざるなり。孤城を援なきに守り、孱主を衆※くに保つ、律義者に非ざれば能はず、故に眞勇は必ず律義者に出づと。尾藤孝肇曰ふ、律義とは蓋し直にして信あるを謂ふと。余謂ふ、孤城を援なきに守るは、谷中將の如くば可なりと。嗚呼中將は忠且つ勇なり、而して孝其の中に在り。

三七　不可誣者人情、不可欺者天理、人皆知之。蓋知而未知。

〔譯〕誣ふ可らざる者は人情なり、欺く可らざる者は天理なり、人皆之を知る。蓋し知つて而して未だ知らず。

〔評〕榎本武揚等五稜郭の兵已に敗る。海律全書二卷を以て我が海軍に贈つて云ふ、是れ嘗て荷蘭に學んで獲たる所なり、身と倶に滅ぶることを惜しむと。武揚の誣ふ可らざるの情天聽に達し、其の死を宥し寵用せらる、天理なり。

三八　知是行之主宰、乾道也。行是知之流行、坤道也。合以成體躯。則知行、是二而一、一而二。

〔譯〕知は是れ行の主宰なり、乾道なり。行は是れ知の流行なり、坤道なり。合して以て體躯を成す。則ち知行は是れ二にして一、一にして二なり。

三九　學貴自得。人徒以目讀有字之書、故局於字、不得通透。當以心讀無字之書、乃洞而有自得。

〔譯〕學は自得を貴ぶ。人徒に目を以て有字の書を讀む、故に字に局し、通透することを得ず。當に心を以て無字の書を讀むべし、乃ち洞して自得するところ有らん。

四〇　孟子以讀書爲尚友。故讀經籍、即是聽嚴師父兄之訓也。讀史子、亦即與明君賢相英雄豪傑相周旋也。其可不清明其心以對越之乎。

〔譯〕孟子讀書を以て尚友と爲す。故に經籍を讀む、即ち是れ嚴師父兄の訓を聽くなり。史子を讀む、亦即ち明君賢相英雄豪傑と相周旋するなり。其れ其の心を清明にして以て之に對越せざる可けんや。

四一　爲學緊要、在心一字。把心以治心、謂之聖學。爲政著眼、在情一字。循情以治情、謂之王道。王道聖學非二。

〔譯〕學を爲すの緊要は心の一字に在り。心を把つて以て心を治む、之を聖學と謂ふ。政を爲すの着眼は情の一字に在り。情に循うて以て情を治む、之を王道と謂ふ。王道と聖學と二に非ず。

〔評〕兵を治して對抗し、互に勝敗あり。兵士或は負傷者の狀を爲す、醫故に之を診察す。兵士初め負傷者とならんことを惡む。一日、聖上親臨して負傷者を撫し、恩言を賜ふ、此より兵士負傷者とならんことを願ふ。是に由つて之を觀れば、兵を馭するも亦情に外ならざるなり。

四二　發憤忘食、志氣如是。樂以忘憂、心體如是。不知老之將至、知命樂天如是。聖人與人不

同、又與人不異。

〔譯〕憤を發して食を忘る、志氣是の如し。樂んで以て憂を忘る、心體是の如し。老の將に至らんとするを知らず、命を知り天を樂しむもの是の如し。聖人は人と同じからず、又人と異ならず。

四三　講説聖賢、而不能躬之、謂之口頭聖賢、吾聞之一惕然。論辯道學、而不能體之、謂之紙上道學、吾聞之再惕然。

〔譯〕聖賢を講説して之を躬にする能はず、之を口頭聖賢と謂ふ、吾れ之を聞いて一たび※然たり。道學を論辯して之を體する能はず、之を紙上道學と謂ふ、吾れ之を聞いて再び※然たり。

四四　學、稽之古訓、問、質之師友、人皆知之。學必學之躬、問必問諸心、其有幾人耶。

〔譯〕學之を古訓に稽へ、問之を師友に質すは、人皆之を知る。學必ず之を躬に學び、問必ず諸を心に問ふは、其れ幾人有らんか。

四五　以天而得者固。以人而得者脆。

〔譯〕天を以て得たるものは固し。人を以て得たるものは脆し。

四六　君子自慊、小人自欺。君子自彊、小人自棄。上達下達、落在一自字。

〔譯〕君子は自ら慊くし、小人は自ら欺く。君子は自ら彊め、小人は自ら棄つ。上達と下達とは、一の自の字に落在す。

四七　人皆知問身之安否、而不知問心之安否。宜自問能不欺闇室否、能不愧衾影否、能得安穩快樂否。時時如是、心便不放。

〔譯〕人は皆身の安否を問ふことを知つて、而かも心の安否を問ふことを知らず。宜しく自ら能く闇室を欺かざるや否や、能く衾影に愧ぢざるや否や、能く安穩快樂を得るや否やと問ふべし。時時是の如くば心便ち放たず。

〔評〕某士南洲に面して仕官を求む。南洲曰ふ、汝俸給幾許を求むるやと。某曰ふ、三十圓ばかりと。南洲乃ち三十圓を與へて曰ふ、汝に一月の俸金を與へん、汝は宜しく汝の心に向うて我が才力如何を問ふべしと。其人復た來らず。

四八　無爲而有爲之謂誠。有爲而無爲之謂敬。

〔譯〕爲す無くして爲す有るを誠と謂ふ。爲す有つて爲す無しを敬と謂ふ。

四九　寛懷不忤俗情、和也。立脚不墜俗情、介也。

〔譯〕寛懷俗情に忤はざるは、和なり。立脚俗情に墜ちざるは、介なり。

五〇　惻隱之心偏、民或有溺愛殞身者。羞惡之心偏、民或有自經溝涜者。辭讓之心偏、民或有奔亡風狂者。是非之心偏、民或有兄弟鬩牆父子相訟者。凡情之偏、雖四端遂陷不善。故學以致中和、歸於無過不及、謂之復性之學。

〔譯〕惻隱の心偏すれば、民或は愛に溺れ身を殞す者有り。羞惡の心偏すれば、民或は溝涜に自經する者有り。辭讓の心偏すれば、民或は奔亡風狂する者有り。是非の心偏すれば、民或は兄弟牆に鬩ぎ父子相訟ふ者有り。凡そ情の偏するや、四端と雖遂に不善に陷る。故に學んで以て中和を致し、過不及無きに歸す、之を復性の學と謂ふ。

〔評〕江藤新平、前原一誠等の如きは、皆維新の功臣として、勤王二なく、官は參議に至り、位は人臣の榮を極む。然り而して前後皆亂を爲し誅に伏す、惜しいかな。豈四端の偏ありしものか。

五一　此學吾人一生負擔、當斃而後已。道固無窮、堯舜之上善無盡。孔子自志學、至七十、每十年、自覺其有所進、孜孜自彊、不知老之將至。假使其踰耄至期、則其神明不測、想當爲何如哉。凡學孔子者、宜以孔子之志爲志。

〔譯〕此の學は吾人一生の負擔、當に斃れて後に已むべし。道固より窮り無し。堯舜の上、善盡くること無し。孔子學に志してより七十に至るまで、十年毎に自ら其の進む所有るを覺り、孜孜として自ら彊めて、老の將に至らんとするを知らず。假し其をして耄を踰え期に至らしめば、則ち其の神明測られざること、想ふに當に何如たるべきぞや。凡そ孔子を學ぶ者は、宜しく孔子の志を以て志と爲すべし。

五二　自彊不息、天道也、君子所以也。如虞舜孳孳爲善、大禹思日孜孜、成湯苟日新、文王不遑暇、周公坐以待旦、孔子發憤忘食、皆是也。彼徒事靜養瞑坐而已、則與此學脈背馳。

〔譯〕自ら彊めて息まざるは天道なり、君子の以ゐる所なり。虞舜の孳孳として善を爲し、大禹の日に孜孜せんことを思ひ、成湯の苟に日に新にせる、文王の遑あき暇あらざる、周公の坐して以て旦を待つ、孔子の憤りを發して食を忘るゝ如きは、皆是なり。彼の徒に靜養瞑坐を事とするのみならば、則ち此の學脈と背馳す。

五三　自彊不息時候、心地光光明明、有何妄念游思、有何嬰累　想。

〔譯〕自ら彊めて息まざる時候は、心地光光明明にして、何の妄念游思有らん、何の嬰累※想有らん。

〔評〕三條公の筑前に在る、或る人其の旅況の無聊を察して美女を進む、公之を卻く。

某氏宴を開いて女樂を設く、公怫然として去れり。

五四　提一燈、行暗夜。勿憂暗夜、只頼一燈。

〔譯〕一燈を提げて、暗夜を行く。暗夜を憂ふる勿れ、只だ一燈を頼め。

〔評〕伏水戰を開き、砲聲大内に聞え、愈激しく愈近づく。岩倉公南洲に問うて曰ふ、勝敗何如と。南洲答へて曰ふ、西郷隆盛在り、憂ふる勿れと。

五五　倫理物理、同一理也。我學倫理之學、宜近取諸身、即是物理。

〔譯〕倫理と物理とは同一理なり。我れ倫理の學を學ぶ、宜しく近く諸を身に取るべし、即ち是れ物理なり。

五六　濁水亦水也。一澄則爲清水。客氣亦氣也。一轉則爲正氣。逐客工夫、只是克己、只是復禮。

〔譯〕濁水も亦水なり、一澄すれば則ち清水となる。客氣も亦氣なり、一轉すれば則ち正氣となる。客を逐ふの工夫は、只是れ己に克つなり、只是れ禮に復るなり。

〔評〕南洲壯時角觝を好み、毎に壯士と角す。人之を苦しむ。其守庭吏と爲るや、庭中に土豚を設けて、掃除を事とせず。既にして慨然として天下を以て自ら任じ、節を屈して

書を讀み、遂に復古の大業を成せり。

五七　理本無形。無形則無名矣。形而後有名。既有名、則理謂之氣無不可。故專指本體、則形後亦謂之理。專指運用、則形前亦謂之氣、竝無不可。如浩然之氣、專指運用、其實太極之呼吸、只是一誠。謂之氣原、即是理。

〔譯〕理は本と形無し。形無ければ則ち名無し。形ありて後に名有り。既に名有れば、則ち理之を氣と謂ふも、不可無し。故に專ら本體を指せば、則ち形後も亦之を理と謂ふ。專ら運用を指せば、則ち形前も亦之を氣と謂ふ、竝に不可無し。浩然の氣の如きは、專ら運用を指すも、其の實太極の呼吸にして、只是れ一誠なり。之を氣原と謂ふ、即ち是れ理なり。

五八　物我一體、即是仁。我執公情以行公事、天下無不服。治亂之機、在於公不公。周子曰、公於己者、公於人。伊川又以公理、釋仁字。餘姚亦更博愛爲公愛。可并攷。

〔譯〕物我一體は即ち是れ仁なり。我れ公情を執つて以て公事を行ふ、天下服せざる無し。治亂の機は公と不公とに在り。周子曰ふ、己に公なる者は人に公なりと。伊川又公理を以て仁の字を釋す。餘姚も亦博愛を更めて公愛と爲せり。并せ攷ふ可し。

〔評〕余嘗て木戸公の言を記せり。曰ふ、會津藩士は、性直にして用ふ可し、長人の及

ぶ所に非ざるなりと。夫れ會は長の敵なり、而かも其の言此の如し。以て公の事を處すること皆公平なるを知るべし。

五九　尊德性、是以道問學、即是尊德性。先立其大者、則其知也眞。能迪其知、則其功也實。畢竟一條路往來耳。

〔譯〕德性を尊ぶ、是を以て問學に道る、即ち是れ德性を尊ぶなり。先づ其の大なる者を立つれば、則ち其知や眞なり。能く其の知を迪めば、則ち其功や實なり。畢竟一條路の往來のみ。

六〇　周子主靜、謂心守本體。※説自註無欲故靜、程伯氏因此有天理人欲之説。叔子持敬工夫亦在此。朱陸以下雖各有得力處、而畢竟不出此範圍。不意至明儒、朱陸分黨如敵讐。何以然邪。今之學者、宜以平心待之。取其得力處可也。

〔譯〕周子靜を主とす、心本體を守るを謂ふなり。※説に、「欲無し故に靜」と自註す、程伯氏此に因つて天理人欲の説有り。叔子敬を持する工夫も亦此に在り。朱陸以下各力を得る處有りと雖、而かも畢竟此の範圍を出でず。意はざりき明儒に至つて、朱陸黨を分つこと敵讐の如くあらんとは。何を以て然るや。今の學ぶ者、宜しく平心を以て之を待つべし。其の力を得る處を取らば可なり。

六一　象山、宇宙内事、皆己分内事、此謂男子擔當之志如此。陳澔引此註射義、極是。

〔譯〕象山の、宇宙内の事は皆己れ分内の事は、此れ男子擔當の志此の如きを謂ふなり。陳※此を引いて射義を註す、極めて是なり。

〔評〕南洲嘗て東湖に從うて學ぶ。當時書する所、今猶民間に存す。曰ふ、「一寸の英心萬夫に敵す」と。蓋し復古の業を以て擔當することを爲す。維新征東の功實に此に讖す。末路再び讖を成せるは、悲しむべきかな。

六二　講論語、是慈父教子意思。講孟子、是伯兄誨季意思。講大學、如網在綱。講中庸、如雲出岫。

〔譯〕論語を講ずず、是れ慈父の子を教ふる意思。孟子を講ず、是れ伯兄の季を誨ふる意思。大學を講ず、網の綱に在る如し。中庸を講ず、雲の岫を出づる如し。

六三　易是性字註脚。詩是情字註脚。書是心字註脚。

〔譯〕易は是れ性の字の註脚なり。詩は是れ情の字の註脚なり。書は是れ心の字の註脚なり。

六四　獨得之見似私、人驚其驟至。平凡之議似公、世安其狃聞。凡聽人言、宜虛懷而邀之。勿苟安狃聞可也。

〔譯〕獨得の見は私に似る、人其の驟至に驚く。平凡の議は公に似る、世其の狃聞に安んず。凡そ人の言を聽くは、宜しく虛懷にして之を邀ふべし。狃聞に苟安することなくんば可なり。

六五　心理是豎工夫、博覽是橫工夫。豎工夫、則深入自得。橫工夫、則淺易汎濫。

〔譯〕心理は是れ豎の工夫なり、博覽は是れ橫の工夫なり。豎の工夫は、則ち深入自得せよ。橫の工夫は、則ち淺易汎濫なれ。

六六　讀經、宜以我之心讀經之心、以經之心釋我之心。不然徒爾講明訓詁而已、便是終身不曾讀。

〔譯〕經を讀むは、宜しく我れの心を以て經の心を讀み、經の心を以て我の心を釋すべし。然らずして徒爾に訓詁を講明するのみならば、便ち是れ終身曾て讀まざるなり。

六七　引滿中度、發無空箭。人事宜如射然。

〔譯〕滿を引き度に中り、發して空箭無し。人事宜しく射の如く然るべし。

六八　前人、謂英氣害事。余則謂、英氣不可無、但露圭角爲不可。

〔譯〕前人は、英氣は事を害すと謂へり。余は則ち謂ふ、英氣は無かる可らず、但だ圭角を露はすを不可と爲すと。

六九　刀槊之技、懷怯心者衂、賴勇氣者敗。必也泯勇怯於一靜、忘勝負於一動。動之以天、廓然太公、靜之以地、物來順應。如是者勝矣。心學亦不外於此。

〔譯〕刀槊の技、怯心を懷く者は衂け、勇氣を賴む者は敗る。必や勇怯を一靜に泯し、勝負を一動に忘れ、之を動かすに天を以てして、廓然太公に、之を靜むるに地を以てして、物來つて順應せん。是の如き者は勝たん。心學も亦此に外ならず。

〔評〕長兵京師に敗る。木戸公は岡部氏に寄つて禍を免るゝことを得たり。後丹波に赴き、姓名を變へ、博徒に混り、酒客に交り、以て時勢を窺へり。南洲は浪華の某樓に寓す。幕吏搜索して樓下に至る。南洲乃ち劇を觀るに託して、舟を※りて逃げ去れり。此れ皆勇怯を泯し勝負を忘るゝものなり。

七〇　無我則不獲其身、即是義。無物則不見其人、即是勇。

〔譯〕我れ無ければ則ち其身を獲ず、即ち是れ義なり。物無ければ則ち其人を見ず、即ち是

れ勇なり。

七一　自反而縮者、無我也。雖千萬人吾往矣、無物也。

〔譯〕自ら反みて縮きは、我無きなり。千萬人と雖吾れ往かんは、物無きなり。

七二　三軍不和、難以言戰。百官不和、難以言治。書云、同寅協恭和衷哉。唯一和字、一串治亂。

〔譯〕三軍和せずば、以て戰を言ひ難し。百官和せずば、以て治を言ひ難し。書に云ふ、寅を同じうし恭を協せ和衷せよやと。唯だ一の和字、治亂を一串す。

〔評〕復古の業は薩長の合縱に成る。是れより先き、土人坂本龍馬、薩長の和せざるを憂へ、薩邸に抵り、大久保・西鄉諸氏に説き、又長邸に抵り、木戸・大村諸氏に説く。薩人黒田・大山諸氏長に至り、長人木戸・品川諸氏薩に往き、而て後和成り、維新の鴻業を致せり。

七三　凡事有眞是非、有假是非。假是非、謂通俗之所可否。年少未學、而先了假是非、後欲得眞是非、亦不易入。所謂先入爲主、不可如何耳。

〔譯〕凡そ事に眞是非有り、假是非有り。假是非とは、通俗の可否する所を謂ふ。年少く未

だ學ばずして、先づ假是非を了し、後に※んで眞是非を得んと欲するも、亦入り易からず。謂はゆる先入主と爲り、如何ともす可らざるのみ。

七四　果斷、有自義來者。有自智來者。有自勇來者。有并義與智而來者、上也。徒勇而已者殆矣。

〔譯〕果斷は、義より來るもの有り。智より來るもの有り。勇より來るもの有り。義と智とを併せて來るもの有り、上なり。徒に勇のみなるは殆し。

〔評〕關八州は古より武を用ふるの地と稱す。興世王反逆すと雖、猶將門に説いて之に據らしむ。小田原の役、豐公は德川公に謂うて曰ふ、東方に地あり、江戸と曰ふ、以て都府を開く可しと。一新の始め、大久保公遷都の議を獻じて曰ふ、官軍已に勝つと雖、東賊猶未だ滅びず、宜しく非常の斷を以て非常の事を行ふべしと。先見の明智と謂ふ可し。

七五　公私在事、又在情。事公而情私者有之。事私而情公者有之。爲政者、宜權衡人情事理輕重處、以用其中於民。

〔譯〕公私は事に在り、又情に在り。事公にして情私なるもの之有り。事私にして情公なるもの之有り。政を爲す者は、宜しく人情事理輕重の處を權衡して、以て其の中を民に用

ふべし。

〔評〕南洲城山に據る。官軍柵を植ゑて之を守る。山縣中將書を南洲に寄せて兩軍殺傷の慘を極言す。南洲其の書を見て曰ふ、我れ山縣に負かずと、斷然死に就けり。中將は南洲の元を視て曰ふ、惜しいかな、天下の一勇將を失へりと、流涕すること之を久しうせり。噫公私情盡せり。

七六　愼獨工夫、當如身在稠人廣座中一般。應酬工夫、當如間居獨處時一般。

〔譯〕愼獨の工夫は、當に身稠人廣座の中に在るが如く一般なるべし。應酬の工夫は、當に間居獨處の時の如く一般なるべし。

七七　心要現在。事未來、不可邀。事已往、不可追。纔追纔邀、便是放心。

〔譯〕心は現在せんことを要す。事未だ來らずば、邀ふ可らず。事已に往かば、追ふ可らず。纔かに追ひ纔かに邀へば、便ち是れ放心なり。

七八　物集於其所好、人也。事赴於所不期、天也。

〔譯〕物其の好む所に集るは、人なり。事期せざる所に赴くは、天なり。

七九　人貴厚重、不貴遲重。尚眞率、不尚輕率。

〔譯〕人は、厚重を貴ぶ、遲重を貴ばず。眞率を尚ぶ、輕率を尚ばず。

〔評〕南洲人に接して、妄に語を交へず、人之を憚る。然れども其の人を知るに及んでは、則ち心を傾けて之を援く。其人に非ざれば則ち終身言はず。

八〇　凡生物皆資於養。天生而地養之。人則地之氣精英。吾欲靜坐以養氣、動行以養體、氣體相資、以養此生。所以從地而事天。

〔譯〕凡そ生物は皆養を資る。天生じて地之を養ふ。人は則ち地の氣の精英なり。吾れ靜坐して以て氣を養ひ、動行して以て體を養ひ、氣と體と相資つて以て此の生を養はんと欲す。地に從うて天に事ふる所以なり。

〔評〕維新の業は三藩の兵力に由ると雖、抑之を養ふに素あり、曰く名義なり、曰く名分なり。或は云ふ、維新の功は大日本史及び外史に基づくと、亦理無しとせざるなり。

八一　凡爲學之初、必立欲爲大人之志、然後書可讀也。不然、徒貪聞見而已、則或恐長傲飾非。所謂假寇兵、資盜糧也、可虞。

〔譯〕凡そ學を爲すの初め、必ず大人たらんと欲するの志を立て、然る後書讀む可し。然らずして、徒に聞見を貪るのみならば、則ち或は傲を長じ非を飾らんことを恐る。謂はゆる

寇に兵を假し、盜に糧を資するなり、虞る可し。

八二　以眞己克假己、天理也。以身我害心我、人欲也。

〔譯〕眞己を以て假己に克つ、天理なり。身我を以て心我を害す、人欲なり。

八三　無一息間斷、無一刻急忙。即是天地氣象。

〔譯〕一息の間斷無く、一刻の急忙無し。即ち是れ天地の氣象なり。

〔評〕木戸公毎旦考妣の木主を拜す。身煩劇に居ると雖、少しくも怠らず。三十年の間一日の如し。

八四　有心於無心、工夫是也。無心於有心、本體是也。

〔譯〕心無きに心有るは、工夫是なり。心有るに心無きは、本體是なり。

八五　不知而知者、道心也。知而不知者、人心也。

〔譯〕知らずして知る者は、道心なり。知つて知らざる者は、人心なり。

八六　心靜、方能知白日。眼明、始會識青天。此程伯氏之句也。青天白日、常在於我。宜掲之

座右、以爲警戒。

〔譯〕心靜にして、方に能く白日を知る。眼明かにして、始めて青天を識り會すと。此れ程伯氏の句なり。青天白日は、常に我に在り。宜しく之を座右に掲げて、以て警戒と爲すべし。

八七　靈光充體時、細大事物、無遺落、無遲疑。

〔譯〕靈光體に充つる時、細大の事物、遺落無く、遲疑無し。

〔評〕死を決するは、薩の長ずる所なり。公義を説くは、土の俗なり。維新の初め、一公卿あり、南洲の所に往いて復古の事を説く。南洲曰ふ、夫れ復古は易事に非ず、且つ九重阻絶し、妄に藩人を通ずるを得ず、必ずや縉紳死を致す有らば、則ち事或は成らんと。又後藤象次郎に往いて之を説く。象次郎曰ふ、復古は難きに非ず、然れども門地を廢し、門閥を罷め、賢を擧ぐること方なきに非ざれば、則ち不可なりと。二人の本領自ら見はる。

八八　人心之靈、如太陽然。但克伐怨欲、雲霧四塞、此靈烏在。故誠意工夫、莫先於掃雲霧仰白日。凡爲學之要、自此而起基。故曰、誠者物之終始。

〔譯〕人心の靈、太陽の如く然り。但だ克伐怨欲、雲霧四塞せば、此の靈烏くに在る。故に

意を誠にする工夫は、雲霧を掃うて白日を仰ぐより先きなるは莫し。凡そ學を爲すの要は、此よりして基を起す。故に曰ふ、誠は物の終始と。

八九　胸次清快、則人事百艱亦不阻。

〔譯〕胸次清快なれば、則ち人事百艱亦阻せず。

九〇　人心之靈、主於氣。氣體之充也。凡爲事、以氣爲先導、則擧體無失措。技能工藝、亦皆如此。

〔譯〕人心の靈は、氣を主とす。氣は體に之れ充つるものなり。凡そ事を爲すに、氣を以て先導と爲さば、則ち擧體失措無し。技能工藝も、亦皆此の如し。

九一　靈光無障碍、則氣乃流動不餒、四體覺輕。

〔譯〕靈光障碍無くば、則ち氣乃ち流動して餒ゑず、四體輕きを覺えん。

九二　英氣是天地精英之氣。聖人蘊之於内、不肯露諸外。賢者則時時露之。自餘豪傑之士、全然露之。若夫絶無此氣者、爲鄙夫小人、碌碌不足算者爾。

〔譯〕英氣は是れ天地精英の氣なり。聖人は之を内に蘊めて、肯て諸を外に露はさず。賢者

は則ち時時之を露はす。自餘豪傑の士は、全然之を露はす。夫の絶えて此氣なき者の若きは、鄙夫小人と爲す、碌碌として算ふるに足らざるもののみ。

九三　人須著忙裏占閒、苦中存樂工夫。

〔譯〕人は須らく忙裏に間を占め、苦中に樂を存ずる工夫を著くべし。

〔評〕南洲岩崎谷洞中に居る。砲丸雨の如く、洞口を出づる能はず。詩あり云ふ「百戰無功半歲間、首邱幸得返家山。笑儂向死如仙客。盡日洞中棋響間」（編者曰、此詩、長州ノ人杉孫七郎ノ作ナリ、南洲翁ノ作ト稱スルハ誤ル）謂はゆる忙中に間を占むる者なり。然れども亦以て其の戰志無きを知るべし。余句あり、云ふ「可見南洲無戰志。砲丸雨裡閒牽犬」と、是れ實録なり。

九四　凡區處人事、當先慮其結局處、而後下手。無楫之舟勿行、無的之箭勿發。

〔譯〕凡そ人事を區處するには、當さに先づ其の結局の處を慮かりて、後に手を下すべし。楫無きの舟は行る勿れ、的無きの箭は發つ勿れ。

九五　朝而不食、則晝而饑。少而不學、則壯而惑。饑者猶可忍、惑者不可奈何。

〔譯〕朝にして食はずば、晝にして饑う。少うして學ばずば、壯にして惑ふ。饑うるは猶忍ぶ可し、惑ふは奈何ともす可からず。

九六　今日之貧賤不能素行、乃他日之富貴、必驕泰。今日之富貴不能素行、乃他日之患難、必狼狽。

〔譯〕今日の貧賤に素行する能はずば、乃ち他日の富貴に、必ず驕泰ならん。今日の富貴に素行する能はずんば、乃ち他日の患難に、必ず狼狽せん。

〔評〕南洲、顯職に居り勳功を負ふと雖、身極めて質素なり。朝廷賜ふ所の賞典二千石は、悉く私學校の費に充つ。貧困なる者あれば、囊を傾けて之を賑ふ。其の自ら視ること※然として、微賤の時の如し。

九七　雅事多是虛、勿謂之雅而耽之。俗事却是實、勿謂之俗而忽之。

〔譯〕雅事多くは是れ虛なり、之を雅と謂うて之に耽ること勿れ。俗事却て是れ實なり、之を俗と謂うて之を忽にすること勿れ。

九八　歷代帝王、除唐虞外、無眞禪讓。商周已下、秦漢至於今、凡二十二史、皆以武開國、以文治之。因知、武猶質、文則其毛彩、虎豹犬羊之所以分也。今之文士、其可忘武事乎。

〔譯〕歴代の帝王、唐虞を除く外、眞の禪讓なし。商周已下秦漢より今に至るまで、凡そ二十二史、皆武を以て國を開き、文を以て之を治む。因つて知る、武は猶質のごとく、文は則ち其の毛彩にして、虎豹犬羊の分るゝ所以なるを。今の文士、其れ武事を忘る可けんや。

九九　遠方試歩者、往往舍正路、※捷徑、或繆入林※、可嗤也。人事多類此。特記之。

〔譯〕遠方に歩を試むる者、往往にして正路を舍て、捷徑に※り、或は繆つて林※に入る、嗤ふ可きなり。人事多く此に類す。特に之を記す。

一〇〇　智仁勇、人皆謂大德難企。然凡爲邑宰者、固爲親民之職。其察奸慝、矜孤寡、折強梗、即是三德實事。宜能就實迹以試之可也。

〔譯〕智仁勇は、人皆大德企て難しと謂ふ。然れども凡そ邑宰たる者は、固と親民の職たり。其の奸慝を察し、孤寡を矜み、強梗を折くは、即ち是れ三德の實事なり。宜しく能く實迹に就いて以て之を試みて可なるべし。

一〇一　身有老少、而心無老少。氣有老少、而理無老少。須能執無老少之心、以體無老少之理。

〔譯〕身に老少有りて、心に老少無し。氣に老少有りて、理に老少無し。須らく能く老少無

きの心を執つて、以て老少無きの理を體すべし。

〔評〕幕府南洲に禍せんと欲す。藩侯之を患へ、南洲を大島に竄す。南洲貶竄せらるゝこと前後數年なり、而て身益壯に、氣益旺に、讀書是より大に進むと云ふ。

青空文庫情報

底本：「西郷南洲遺訓」岩波文庫、岩波書店
　1939（昭和14）年2月2日第1刷発行
　1985（昭和60）年2月20日第26刷発行
底本の親本：「南洲手抄言志録」博聞社
　1888（明治21）年5月17日発行
初出：「南洲手抄言志録」博聞社
　1888（明治21）年5月17日発行
※「褒」の「保」に代えて「丑」」は「デザイン差」と見て「衰」で入力しました。
※底本の末尾に添えられた「書後の辭」で、秋月種樹氏が漢文の評言を附したとある。
入力：田中哲郎
校正：川山隆
2008年7月14日作成
2009年9月1日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られまし

た。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

南洲手抄言志録

南洲手抄言志録

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　佐藤一齋・秋月種樹（古香）
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/